

長崎聖福寺蔵黄檗資料解説

李湖江

(福建師範大学)

2019年6月末、筆者は招きに応じ、日本長崎県で開催された「隠元禅師と黄檗文化」日中シンポジウムに参加した。長崎滞在期間中、日本黄檗宗聖福寺を視察し、昌弘仁明住職の許可をもらい、聖福寺に所蔵された書道、絵画や書簡などの黄檗資料を撮影することができた。

一、聖福寺所蔵書道・絵画

1. 隠元、木庵、即非像（図1）

江戸時代に、黄檗頂相画が上手な親子がおり、父親の名は喜多道矩、息子の名は喜多元規である。二人とも隠元騎獅像を画いたことがある。では、一体、この作品の作者は誰であろうか？作品の左下に「元規」という印鑑が押していることから、喜多元規の作品である。また、近藤秀実氏による著書である『波臣画派』の中には、1644年、喜多元規の作品「隠元、木庵、即非像」は京都法林院に所蔵と記述されている。そのため、この絵画は喜多元規の作品だといえる。それは確かに1664年のものであるが、上部に書かれている隠元禅師の題詞は当時書かれたものではないようである。

それは、隠元が題詞の最後に「岁庚戌仲冬日、黄檗隠元老僧自題」と、作成時期が明記されているからである。つまり、1670年の旧暦11月に書かれたものである。上部に書かれた内容は三つの文に分けられる。第一文は「騎个獅子、一如天然」。仏教では、獅子は縁起の良い獣で、文殊菩薩の乗り物はまさに獅子である。

獅子は森林の王様であり、一声吼えれば、百獣も驚くことから、仏経の中でも仏陀のことが「獅子吼」と喩えられている。ここに描かれる「獅子」は乗り物ではなく、仏陀のシンボルである。第二文は「助扬师道、耀后光前」。中国禅宗の臨済宗黄檗派は隠元禅師により日本まで伝えられ、日本黄檗宗に発展した。隠元禅師は黄檗宗を広げたいと望んでいた。第三文は「杖头突出超方眼、直透西河玄上玄」である。これは、禅修の際、平凡を越え、広い視野を得て、悟りの最高境界に達するということである。



図1

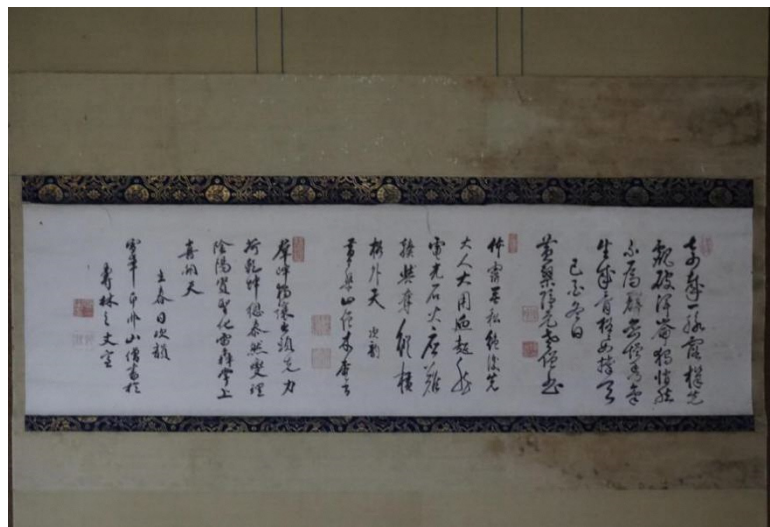


図2

2.黄檗三禅師次韻（図2）

隠元禅師と弟子の木庵禅師、即非禅師三人は書が得意で、「黄檗三筆」と呼ばれている。上の墨跡（図2）は三禅師の合作で完成したものであり、詩三篇はいずれも福建省福清市にある黄檗山の天柱峰を賛美するものである。福清黄檗山は宝峰、屏嶂峰、紫薇峰、獅子峰、香炉峰、仏座峰、羅漢峰、鉢盂峰、天柱峰、五雲峰、報雨峰、吉祥峰の12峰からなっている。

宋の時代に、王大復という人が黄檗十二峰の名を使い、「叙題十二峰」という詩を書いた。「宝峰屏嶂紫薇辺、獅子香炉仏座前、羅漢鉢盂天柱上、五雲報雨吉祥連」で、詩歌ならではのリズムで暗唱した。明の時代に、「黄檗山寺志」の記載によると、隠元隆琦と師匠の費隠通容の二人とも「黄檗十二峰」という詩を書いたことがあり、この12の峰をそれぞれ賞した。

中国古代の伝統礼儀作法によると、右を尊ぶということである。これは、官界と日常生活、書道、絵画など芸術品からも見られている。この書道作品の一番右にあるのは、「咏黄檗十二峰・天柱」という隠元禅師の作品で、内容は「奇哉一脉露机先、覷破浑仑独峭然、不为群峦增秀气、生成骨格要撑天」である。この詩は仏法自体への描写であり、天柱峰を仏法に喩え、その雄大さと尊さを現した。詩の最後に「己酉（年）冬日黄檗隠元老僧書」と制作年が明記されており、1645年である。「隠元禅師年表」によると、1645年長楽県の龍泉寺の檀越たちが隠元禅師を龍泉寺の住職に招いた。唐の時代の百丈懐海祖師が長楽龍泉寺の住職についたことがあるため、隠元禅師はその招きに応じた。隠元禅師の尽力で、龍泉寺は一新したということである。隠元禅師がこの詩歌を書いたのは1645年で、当時はまだ龍泉寺の住職だったから、これは日本へ渡る前に書いたものだと推測できる。

中央にある『次韻天柱峰』という詩は木庵禅師が書いたものであり、隠元禅師の詩の音韻に従い、唱和の詩である。内容は「体露无私绝后先、大人用迥超然、电光石火应难倭、与夺纵横格外天」である。この詩は仏法に対する描写であり、地位の差別も時期別もなく、タイミングを把握し、速やかに禅宗の精神を理解するというものである。詩の最後に制作年は書かれていないが、隠元禅師の詩より遅いものだとはいえるだろう。左の方には即非禅師の作品であり、テーマも同じく「次韻天柱峰」で唱和の詩である。内容は「群峰独让出头先、力荷乾坤总泰然、變理阴阳资圣化、雷轰掌上喜开天」である。この詩は仏法の作用について描き、即ち、世間万物を調和し、普通の人間を聖人に転化させられるということだ。即非禅師の詩の最後に「立春日次韻雪峰即非山僧寿林の室に題す」と書いてある。「寿林」は長崎の聖寿山崇福寺のことと推測され、つまり、即非禅師の詩は日本に渡った後に作ったものである。従って、作品の制作時期から見ると、木庵禅師の詩は隠元禅師の詩より遅いが、即非禅師の詩より早いことが明らかになった。これは時間と空間を超え、「黄檗三筆」が共に作った貴重な作品である。

3.聖福寺初代住職 鉄心道胖（図3）

鉄心道胖は1641年10月24日生まれで、父親の陳朴純は福建省漳州市出身で、母親の西村松月院は日本人である。鉄心道胖は木庵性瑠の弟子で、臨濟宗の第34世である。1677年、鉄心道胖は長崎聖福寺を開創し、住職に務めた。聖福寺は長崎の興福寺、崇福寺、福濟寺といった三つの寺院と共に、「四福寺」と称されている。当時、中国と長崎の間で往来していた中国僑民たちに宗教または貿易に関するサービスを提供していた。その後、鉄心道胖は東京瑞聖寺の住職も務めた。1710年10月3日に示寂、享年は70歳であった。画像(図3)の上部に、鉄心道胖が書いた題言があり、「奇哉奇哉、幼くして入門、数年務め。禅できず、道わからず。人に会うたびに「お茶へ行こう！」と言う。数

年務め、何故に禅できず、道分からず？え！雪日に庭に立ち留まりなし、そのような人間も知らず。龍集戊子仲春日、聖福開山現住瑞聖鉄心道胖僧侶題」である。この一言では鉄心道胖出家の経緯が明らかになった。鉄心道胖が生まれてから二か月半の時、父親がなくなった。彼は 14 歳の時、木庵禅師の門を叩き弟子入り、出家したということである。また、ここには二つの禅宗物語も引用されている。一つは唐の時代の趙州禅師が「お茶を飲みにいく」という物語で、もう一つは北魏時期の慧可禅師が「庭前立雪」の物語である。前者は物事を差別視しないことを教えているが、後者は努力し、精いっぱい修行すべきだという教えを伝えている。最後の注により、鉄心道胖が書いたのは戊子年、つまり 1708 年である。しかし、画像の作者と制作年は確認できず、2016 年に発行された『聖福寺保存会五十周年記念誌』の中にも記載されていない。



図 3

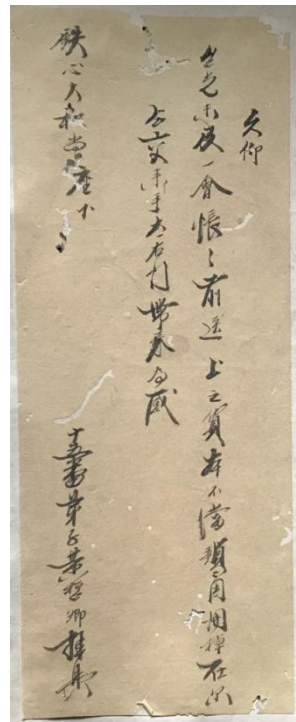


図 4

二、聖福寺所蔵「唐船寄付状帖」（図 4）

聖福寺には、中国の明・清時代の日本人の僧侶と中国人の船主の間で交わされた貴重な書簡が収蔵されている。現存の手紙は約は百通で、十五番船から七十七番船までの文通が保存されているが、十五番船前の手紙は確認できない。通常は同じものを三部複写して、それぞれ鉄心道胖大師、松月院（松月庵）、聖福寺修理禅師に送る。

その中に、このようなものがあつた。十五番船の船主である黄哲卿が鉄心道胖に宛てた手紙には次のように書かれている。「久仰台兄，未及一会，悵悵。前送上之貨，本不当琐，因开棹在尔。分交来手太右门带来为感。鉄心大和尚座下，十五番弟子黄哲卿拜具」この手紙は 1706 年（宝永 4 年）に書かれたもので、300 年余りの歴史があるが、理解するのはそれほど難しくない。具体的にいうと、黄哲卿は聖福寺の住職であつた鉄心道胖に品物を届け、長崎を離れる際に、お金を求めるため、この手紙を書いた。催促行為ではあつたが、言葉は非常に丁寧だつた。黄氏は長年にわたり中国と日本を行き来し、貿易を行つていた。大庭脩の「江戸時代日中秘話」には、1725 年（享保十年）、当時 73 歳の黄哲卿

は第 26 番船に乗って日本に到着した。また、中国では子供がいなかった黄哲卿が長崎で日本人の女性と結婚し息子ができた。そのため、老後も日本と中国を行き来していたことが記されている。収蔵された一連書簡及び他の史料により、聖福寺を含む黄檗宗の寺院は、当時の日中貿易の中枢ではないかと推測されている。

貿易に関わることから、数字は欠かせない存在で、書簡の中に民間における独特な数字記号が含まれており、やがて「蘇州碼子（コード）」と名付けられた。蘇州コードの組み合わせの規則は以下の通り。「1 2 3 4 5 6 7 8 9」はそれぞれ「丨 丨丨 丨丨丨 メ ム ㄣ ㄩ ㄣ ㄣ」で表示されている。例を挙げてみると、第 6 8 番船の貨物リストは数多くの蘇州コードを用い、規則に従って具体的な数字に翻訳された。図が示しているように、「図 5、図 6」：橘餅 3 バケツ総重量 452 斤【斤：中国の重さの単位】、バケツを除いて 72 斤、純重量 380 斤。数式で換算すると、 $452 - 72 = 380$ 「斤」。このことから、蘇州コードの翻訳が完全に正しいことが判明できる。

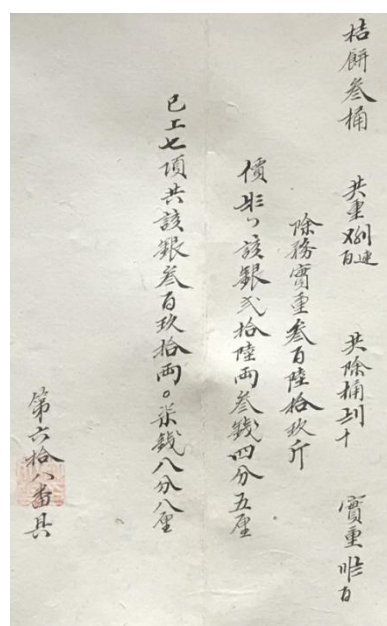


図 5

桔餅参桶
共重 452
共除桶 72
實重 380
除務實重 参百陸拾玖斤
價 卅一 該銀式拾陸兩叁錢四分五厘
已上七項共該銀 参百玖拾兩〇柒錢八分八厘
第六拾八番具

図 6

黄檗関連書簡の照合と解釈は頭をいっぱい使って、退屈な作業であるかもしれないが、達成感とともに、喜びをもたらしてくれた活動でもある。「唐船寄附状帖」を整理する際、蘇州コードが読み取れるようになった。達成感を獲得する一方、すごく満足した。結びに、黄檗の高僧に見習い、感情を込めて詩も作った。

也大奇！也大奇！

时光飞逝水流急。

万物胸中存无迹，

眼底藤萝翠欲滴。

参考書類：

1. 「日」近藤秀実 「波臣画派」長春：吉林美術出版社、2003 年、P146
2. 「中」林観潮注釈 「中日黄檗山誌五本合刊」北京：宗教文化出版社、2018 年、P57
3. 「中」李湖江編集 「黄檗宗文献三種校釈」北京：宗教文化出版社、2019 年、P17
4. 「日」榊原直樹 「黄檗宗大本山万福寺歴代住職集」黄檗宗布教師会発行、2011 年 P93
5. 「日」大庭脩著 徐世虹訳 「江戸時代日中秘話」北京：中華書局、1997 年、P174-175